

## カミュの作品における「アラブ人」

ピエール＝ルイ・レイ

カミュは「アラブ人」という語に、アルジェリアのユダヤ人を除くすべての現地人を含めている。だが、そこに人種差別的立場の徴候を読み取ることは差し控えるべきだろう。1939年、カビリア地方の調査報告を行ったとき、ベルベル人社会の悲惨な生活の特殊性を知り、それを告発するのに彼は誰よりも好都合な立場にあった。ただこの場合には、彼はアルジェリアの大部分のフランス人と同様の立場を表明したにすぎない。また別の状況において、彼のジャーナリストとしての活動は、フランスが被植民者に対して行った不正を熱をこめて告発した。入植は彼の目にとっては罪ではなかった。歴史はその起源以来、相次ぐ征服によって作られてきたのだ。しかし彼は、征服者が被征服者の存在を認めないような植民地主義を拒否する。

カミュは「アラブ人」と交際し、しばしば友情を結んだが、それは小学校やリセ、大学（そこにはアラブ人は驚くほど少なかった）においてではなく、むしろサッカー選手、ジャーナリスト、そして作家としての活動を通じてであった。しかし、1937年（この年、彼はアルジェリア共産党から「アラブ人」の戦闘的民族主義者を勧誘する任務を負わされた）、彼が地中海共同体の建設を構想したとき、それがロマンス語によって統一されるだろうと想像したのであって、アラビア語によってではなかった。彼は学校でアラビア語を学ばなかったし、その後も話せるようにはならなかった（ここでも彼の体験は、都会で育ったアルジェリアのほとんどすべてのフランス人と同様であった）。

「アラブ人」は、アルジェリアの輝かしい風景のなかで孤独な幸福が表明される『結婚』には姿を見せない。彼らは『夏』においてもほとんど現れず、カミュがかろうじて入り込んだ貧しいカスバには絵画的効果しか与えられていない。『異邦人』の「アラブ人」は影のような存在であり、通じ合えない二つの共同体の犠牲者である。『ペスト』においては、オランの人口の半分はアラブ人が占めていたはずなのに、カミュが占領された町の寓話を書

くときにそれが他の意味を帯びるのを避けようとするかのように、ひとりのアラブ人も登場しない。『最初の人間』では、「アラブ人」たちはジャック・コルムリの誕生におけるほとんど封建的な場面に居合わせるが、草稿では F.L.N.の闘志であるサドックとして登場する。ジャックの子供時代や青春時代の物語では、ここでもまた彼らは影のような無言の存在として背景を横切る。貧しいアルジェリア人の少年が、自分と同じように貧しい「アラブ人」の仲間よりも豊かなヨーロッパ人の家族と親交を結ぶ方がいっそう容易であったという、そうした体験がここに反映している。テロリストたちについては、彼らが植民地の施設を脅かした時代と同様、「フェラガ」ではなく「悪党」と呼ばれている。結局、カミュはかつてアルジェリアの民族主義者たちと接触をもったが、その後はすべてはふたたび始めることができると夢想するユートピア的小説（少なくとも現在私たちが目にするかぎり）のなかでは、彼らの要求を知らなかった。『追放と王国』では「アラブ人」たちが前面に登場するが、しかしそれは（とりわけ「客」において）彼らと対話を交わすことは困難であるという考えを強化するのである。とはいえ、カミュがこれらの短編において現地人たちのもっとも美しい肖像を描いているということは意味深い。そして、カミュの演劇については、その主題が「アラブ人」には関わりなく、彼らの不在を指摘しても意味がないことではあるが、しかし彼の生涯における二つの情熱であった舞台とアルジェリアを結びつけることがなかったということは、気にかかることではある。

カミュは「政治参加した（アンガジェ）」作家ではなかった。あらゆる社会階層について詳細な調査を行ったゾラよりは、むしろ彼はバルザックやプルースト（彼らの作品世界は同時代の社会をきわめて部分的に表現している）に近い作家である。カミュの小説作品は、自分の国の社会状況について限られた視野しかもてなかったアルジェリアのフランス人の精神構造を反映している。この意味において、その美を越えて、カミュの小説はきわめて興味深い証言となる。彼の政治参加は、その類稀な明晰さと勇気によって、むしろジャーナリストとしての仕事や市民としての活動にいっそうよく表明されたのだ。